

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02587

研究課題名(和文) 学級活動中の「比べ合う」話し合いの研究 文字を使って話し考える手法の追究

研究課題名(英文) A Study on 'Comparing Opinions' Phase of Discussions in Class Meeting Activities: a pursuit of tools for discussing and thinking through written language

研究代表者

添田 晴雄 (Soeda, Haruo)

大阪公立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30244627

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：「学級会」の話し合いには、オーソドックス方式、原案方式、A or B方式などのような多様性があるが、「学級会」前後の一連の話し合い活動を含めて考察すると、すべてに共通点がある。多様性はどの部分を中心に児童に深く話し合ってもらいたいという指導観の違いによって生じており、それぞれの方式がもつ特徴と限界を意識して指導したり、児童にもそのことを意識させて話し合わせたりすることが大切である。また、比べ合う話し合いをさせる際に、学級目標や提案理由など、準拠すべき価値観を可視化し、比べる際に依拠させることが重要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

45分間の「学級会」における方式の是非を45分間の形式だけで論じるのではなく、教師が一連の話し合いの中のどの部分を児童に学ばせたいかという指導観の議論が重要であり、その指導観が堅固であれば、方式の選択や組み合わせ、そして、各方式の最適化が図れることを示唆した。また、比べ合う話し合いの際に、学級目標や提案理由などの共通する価値観に準拠して話し合わせる重要性を示し、比べ合う話し合いが人気投票的な多数決にならない方策を示唆した。

研究成果の概要(英文)：Discussions in class meetings have variations such as the orthodox method, the original proposal method, A or B method, and so on, however, these variations have the same components in common when they are observed as a full train of discussions including pre-class and post-class discussion activities. The variations have arisen from teachers' allocation of emphasis.

It is important to understand positive characters and limitations of whatever methods of discussion teachers choose. It is also suggested that visualization and utilization of class goals and reasons for proposal, as shared values, when children compare their opinions.

研究分野：教育学

キーワード：学級活動 学級会 話し合い 可視化 黒板

## 1. 研究開始当初の背景

本研究が対象としているのは、小学校学習指導要領が定める「学級活動(1)」すなわち「学級や学校における生活づくりへの参画」における話し合い活動として実践されてきた多様な話し合いである。学級活動である限り、話し合い自体は学級内で行われるが、話し合われる内容は、学級内の生活づくりに留まらず、児童会活動や学校行事などといった学校全体の生活づくりにつながる内容も含まれる。学級活動、児童会活動、学校行事は、卒業後においては、職業生活の中心となる職場における集団や、日々の生活の基盤となる家族といった集団での生活につながる活動であり、地域社会における自治活動につながる活動であり、また、地域や社会の行事や催し物など、様々な集団で所属感や連帯感を高めながら一つの目標などに向かって取り組む活動につながる活動である。したがって、学級活動における話し合い活動には、将来、多様な他者と合意形成を図りながら持続可能な社会を創っていくための資質・能力を養うことが期待される。

ところが、話し合いの指導の仕方に自信がない教師が少なからずいる。そこで公開されたのが『楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)』(教員向け指導資料国立教育政策研究所、2014年)である。論点の3つの柱、「出し合う」「比べ合う」「まとめる(決める)」の三段階討議法(宮川八岐『改訂版 やき先生の特別活動講座 学級会で子どもを育てる』文溪堂、2012年、74頁)などが、板書例とともに紹介されており、これに従えば、初心者の教師でも入門的な話し合い活動が指導できるようになっている。

一方で、この指導資料が話し合い活動の画一化を招いたことも事実である。実は、全国には、それぞれの地方で個性をもった話し合い活動の実践実績があった。たとえば、企画委員会の児童があらかじめ「原案」を作成し、45分間の「学級会」では、その原案を検討することから始める方式(いわゆる「原案方式」)あるいは、児童の出した意見の中から、のちに価値観をめぐる議論ができるような2つの意見を早い段階で教師が抽出し、45分間の「学級会」では、児童に主にその2つの意見を巡って議論させる方式(いわゆる「A or B方式」)などである。しかし、これらの特徴ある実践よりも上記の指導資料どおりに実践するのが「正しい」といった誤解も生じている。誤解が生じる原因は、特徴ある話し合い実践が、実は限られた地域でしか知られていなかったり、あるいは個別にしか研究されなかったりしており、全国の多様性の中で相対化して論じられることがなかったことにある。また、これらの実践に、「出し合う」「比べ合う」「まとめる(決める)」の三段階討議法がどう整合するのかといった研究もなかったことも原因のひとつである。

## 2. 研究の目的

小学校学習指導要領が定める「学級活動(1)」すなわち「学級や学校における生活づくりへの参画」における話し合い活動として、全国の各地でそれぞれに実践されてきた多様な話し合いの仕方を、(1)その進め方に着目して類型化し、それぞれの共通点と相違点を明らかにした上で、(2)それぞれの実践をビデオ録画して、それらの話し合いの進行の中で、「出し合う」「比べ合う」「まとめる(決める)」の3つの段階がどのように位置づけられているかを分析し、(3)それぞれの段階の中で、児童が音声だけでなく文字(黒板、短冊、ワークシート等)も使って話し合いを深めているかどうかを分析し、(4)児童がどのように文字(黒板、短冊、ワークシート等)を使えば「比べ合う」活動が深まるかを理論的、実証的に特定することを目標にし、その研究成果を教育実践に還元することを目的としている。

## 3. 研究の方法

全国の特徴ある話し合い活動を文献を使い、分担者、協力者で討議して類型化する。

類型化した各話し合いにつき、関係者にインタビューすることによって、目的、議題の傾向、児童の特徴などの観点から共通点と相違点を整理する。

類型化のうち2つのタイプを選び、それぞれ1クラスずつをビデオ録画(2カメラで教室全体と1児童の手元を同時に録画)して、分担者、協力者で視聴して、「出し合う」「比べ合う」「まとめる(決める)」の3段階がどのように位置づけられているかを分析する。

また、同じビデオ録画(とくに児童手元ビデオ)を分担者、協力者で視聴し、他の児童のノート、ワークシート等も分析し、文字(黒板、短冊、ワークシート)の使われ方を分析する。

「比べ合う」に適切な文字(黒板、短冊、ワークシート)の使い方を考察し、日本特別活動学会で中間発表する。すべてのタイプについて2クラスずつビデオ録画(2カメラ)し、文字起こしをし、共通点、相違点を整理し、必要な場合は再類型化を行い、分担者、協力者で視聴して、「出し合う」「比べ合う」「まとめる(決める)」の3段階がどのように位置づけられているか、文字(黒板、短冊、ワークシート)がどう使われているかを分析する。

#### 4. 研究成果

「学級会の流れと構成要素」、「事前指導と教師の指導観」、「思考ツールの活用と板書」の3つの観点から分析を行った。

##### (1)「学級会の流れと構成要素」

さまざまな類型があったが、大別すると、オーソドックス方式、原案方式、A or B方式の3つに類型化される。

オーソドックス方式は、『楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)』(国立教育政策研究所、2014年)をモデルにしている。モデルでは、45分間の話し合いで、何をするか、どのように工夫するか、どのような係りが必要か、といった3つの柱とした議題を話し合い、それぞれ、「出し合う」「比べ合う」「まとめる(決める)」の3段階を踏むことが示されている。

しかしながら、ビデオ録画したり、観察をおこなったりした授業では、3つの柱すべてを網羅して話し合うことができたものはなかった。一方、第1の柱である、何をするか話し合いに比較的多くの時間をとって意見の理由をていねいに話し合わせるケース、第2の柱のどのように工夫するか比較的多くの時間をとるケースなどの多様性があった。後者はさらに、柱1で出てきた複数の意見を組み合わせる工夫に多くの時間をかけるという特徴をもつものもあった。

原案方式は、企画委員会の児童があらかじめ「原案」を作成し、45分間の「学級会」では、その原案を検討することから始める方式である。原案は学級会に先だち公表されており、場合によっては、すでに付箋紙などで意見がついている状態から、学級会の話し合いが始まることもあった。学級会の話し合いでは、納得がいけないところがないか、不安なところがないか、から議論し、原案に付け加えるべき工夫や部分的な改良、役割分担などが話し合われた。

A or B方式は、学級会までに児童が出した意見の中から、のちに価値観をめぐる議論ができるような2つの意見を早い段階で教師が抽出し、45分間の「学級会」では、児童に主にその2つの意見を巡って議論させる方式である。理由や根拠をのべながら議論するための時間が十分確保されているのが特徴である。

##### (2)「事前指導と教師の指導観」

45分の「学級会」で行われることに着目すると、上記(1)のように多種多様な話し合い形式があるという結論になるが、学級会の事前指導による児童の話し合い活動、学級会そのものの話し合い活動、学級会後の(本番までの)児童の話し合い活動といった一連の活動を俯瞰的に分析すると、どの方式であっても、柱1(何をするか)の出し合う、比べ合う、まとめる、柱2(工夫する)の出し合う、比べ合う、まとめる、柱3(係りを考えて決める)の出し合う、比べ合う、まとめる、の要素が共通して存在することがわかった。オーソドックス方式では、これらをすべて45分間に盛り込もうとする試みであるが、現実的には、柱1ないしは柱2に注力することになっている。原案方式では、オーソドックス方式の柱1にあたる部分を学級会の事前に済ましておき、その結論部分から45分間の話し合いを始めさせる方式であり、A or B方式は、その原案がまとまる1歩手前の状況から45分間の話し合いを始めさせる方式であると解釈できた。

方式の特徴は、指導にあたる教師が、一連の話し合いの中で、どの部分を中心に児童に深く話し合ってもらいたいという指導観の違いによって生じていると考えられる。

そうであるなら、さまざまに「方式」を選択して実施する際、それぞれの方式がもつ特徴と限界を意識して指導したり、児童にもそのことを意識させて話し合わせたりすることが大切であると言える。

##### (3)「思考ツールの活用と板書」

いわゆる「思考ツール」の分析にまでは及ばなかったが、話し合いを可視化する、磁石や短冊(または板書)について考察した。児童が意見を「出し合う」際に多用される磁石(同じ意見の場合に、その意見が書かれている短冊の下に、発言ひとつにつき1個のカラー磁石をつける)が、実質的な多数決になっていることが散見された。また、「比べ合う」話し合いの際に、提案理由や学級目標等、話し合いの前提となる価値観が短冊や板書などで提示され可視化されていることが必要で、また、児童がその価値観に準拠せずに「比べる」意見を言ったさいに、教師が介入することが必要であることが確認できた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 秋山麗子	4. 巻 44
2. 論文標題 学級活動(1)の話し合い活動における児童の思考の可視化・操作化・構造化についての研究 - 小学4年生の学級会の授業分析を通して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西教育学会年報	6. 最初と最後の頁 155-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 秋山麗子	4. 巻 5
2. 論文標題 小学校の学級会における話し合いの可視化・操作化・構造化に関する研究 3校の学級会の板書記録の比較検討を通して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学教職支援センター年報	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 川本和孝、秋山麗子	4. 巻 29
2. 論文標題 重点課題研究プロジェクトB (地域研) 報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本特別活動学会紀要	6. 最初と最後の頁 87 - 88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中光晴	4. 巻 1
2. 論文標題 特別活動の国際比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 汐見稔幸 (監修), 奈須正裕 (監修), 上岡 学 (編集), 林 尚示 (編集) 『特別活動の理論と実践』 ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 214-225
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 添田晴雄	4. 巻 1
2. 論文標題 特別活動の目標および主な内容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 上田学、林尚示編著『アクティベート教育学 特別活動の理論と実践』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋山麗子	4. 巻 14
2. 論文標題 今、既にある「特別活動の室」から創造するキャリア教育 “小学校の係活動の見直し” から考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育情報	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋山麗子	4. 巻 49 - 15
2. 論文標題 「キャリア教育」をどう進めるか 児童が自立的に未来を切り拓いていくために 小学校特別活動での実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育PRO	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中光晴	4. 巻 1
2. 論文標題 第5章 韓国	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 諸外国の教育動向2018年版 (文部科学省編)	6. 最初と最後の頁 165-213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中光晴	4. 巻 1
2. 論文標題 外国の特別活動（韓国）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 キーワード拓く新しい特別活動（東洋館出版）	6. 最初と最後の頁 133-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 添田晴雄	4. 巻 1
2. 論文標題 人間関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 キーワード拓く新しい特別活動（東洋館出版）	6. 最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋山麗子	4. 巻 35
2. 論文標題 特別活動の先行実施を受けた学校現場の現状と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文溪堂『道徳と特別活動』	6. 最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤井健人、澤村力也、廣田晃土、吉井貴彦、三浦晴代、川本和孝
2. 発表標題 学級会が地域・学校で独自の発展を遂げてきた要因分析 半構造化インタビューによる4タイプの話し合いの比較から
3. 学会等名 日本特別活動学会第29回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野晃弘
2. 発表標題 学級会における児童の思考の可視化についての研究 思考ツールを用いた板書による価値観の共通理解をねらって
3. 学会等名 日本特別活動学会第29回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小原淳一
2. 発表標題 小学校における学級活動(1)の「話し合い活動」の合意形成について ツールミンモデルを用いた合意形成
3. 学会等名 日本特別活動学会第29回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田真紀、長沼豊、清水克博、村瀬悟、秋山麗子、添田晴雄
2. 発表標題 パネルディスカッション特別活動の望ましい教員養成と現職教育の在り方について
3. 学会等名 日本特別活動学会2019年第1回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中光晴、川本和孝、小原淳一、藤井健人、秋山麗子
2. 発表標題 学級会の話し合いを可視化した板書記録の分析
3. 学会等名 日本特別活動学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋山麗子
2. 発表標題 学級会活動(1)の話合い活動における児童の思考の可視化・操作化・構造化についての研究 小学4年生の学級会の授業分析を通して
3. 学会等名 関西教育学会第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋山麗子
2. 発表標題 これからの特別活動がめざすこと 「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を育てるために
3. 学会等名 第37回大阪府小中特別活動研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中光晴、川本和孝、藤井健人、三浦晴代、小原淳一、秋山麗子
2. 発表標題 学級会における話合いの可視化に関する研究 黒板記録(板書)に着目して
3. 学会等名 日本特別活動学会2019年度第2回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 秋山麗子
2. 発表標題 特別活動の話合い活動における児童の思考の構造化についての研究～発言の質的側面からの検討～
3. 学会等名 日本特別活動学会第27回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 秋山麗子
2. 発表標題 小学校でのキャリア教育をどう進めるか
3. 学会等名 日本特別活動学会近畿支部研究会シンポジウム
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 添田晴雄	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 400
3. 書名 文字と音声の比較教育文化史研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川本 和孝  (Kawamoto Kazutaka)  (40365870)	玉川大学・TAPセンター・准教授   (32639)	
研究分担者	秋山 麗子  (Akiyama Reiko)  (50826857)	神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・教授   (34513)	
研究分担者	田中 光晴  (Tanaka Mitsuharu)  (00583155)	国立教育政策研究所・国際研究・協力部・フェロー   (62601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------